

シリーズ

かほく
市の

文化財 No.44

遺物 編 かほく市で出土した不思議な遺物（2）

今回は、かほく市で出土した不思議な遺物として、いくつかの遺跡の遺物をピックアップして紹介します。

まずは、かほく市氣屋にある氣屋遺跡から、珠洲焼の甕の底部が出土しています。これだけであれば、ただの破片ですが、よく観察すると底部の内側の面がすべすべと摩滅しており、何かを強く擦りつけて使用していましたことが分かります。

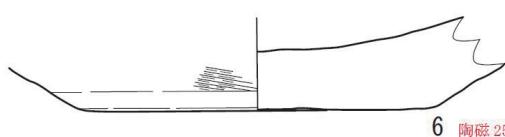
甕は、本来の完形であれば器の高さ50cmを超える大きさのものが多くみられます。そのため、甕が割れた後に底部のみを、鉢のようない使い方をしていたことが推定されます。加えて、縄文土器の破片を加工し、両端部を打ち欠いてオモリにした土器片錘も出土しています。

また、かほく市森にある御子田遺跡では、井戸を発掘調査で確認しています。

このように、本来の道具の使い方では無く、別の使い方をしていることを「転用」といいます。そして、これら転用されたものから、当時の人たちが物を大事にし、使い切る精神が伺えます。6月は「環境月間」です。遺物を通じて、資源やゴミ問題などの環境について改めて考えてみませんか？

この井戸は、井戸側（内部のこと）として、底の無い曲物を少なくとも3段に重ねて使用されていました。他にも全国的な状況に目を向けると、舟だつたものを井戸側に使用している場合や、破損した石斧を叩石にしたものなど、様々な例が確認されています。

内面が「すべすべ」と摩滅しており、使い込まれたことが理解できる。器として本来であれば、手が届く深さではないため、割れたあとに再利用していることが推定される。



気屋遺跡出土 珠洲焼（甕の底部）



御子田遺跡出土 井戸
写真の中心が井戸側。曲物を3段重ねて作られている。



気屋遺跡出土 土器片錘
縄文土器片の端（赤丸の箇所）を打ち欠く加工し、再利用している。